

## 丹下甲一『郵便史』（『「日専」を読み解くシリーズ』）

藤田，裕邦  
福岡大学

<https://doi.org/10.15017/13894>

---

出版情報：エネルギー史研究：石炭を中心として. 24, pp.113-121, 2009-03-19. 九州大学附属図書館  
付設記録資料館産業経済資料部門  
バージョン：  
権利関係：

# 【書評】丹下甲一『郵便史』

（『日専』を読み解くシリーズ）

藤 田 裕 邦

## 一 本書の基本的性格と切手収集―郵趣―について

一九七〇年代の前半、万国博記念切手や高松塚古墳切手の発行、あるいは、アメリカ施政下で独自の切手を発行していた沖縄の本土復帰に刺激されて、日本はいわゆる切手ブームに沸いていた。現在四〇代・五〇代の人は学校が引けると新発行の記念切手を買いに郵便局に走り、七〇代・八〇代の人は我が子の代わりに早朝から郵便局の前に並んだことであろう。そんな時代、やはり切手少年であった評者は、小・中学生向け切手趣味雑誌の記事の中で、丹下甲一氏の名前を目にした記憶がある。当時確か高校生か大学生であった氏は、若手の郵趣家―切手収集家は自身を表すのにこの語を用いる―の一人としてすでに有名であったが、その丹下氏が永年にわたる切手収集経験を踏まえて、郵趣家の立場から上梓したのが本書『郵便史』である。

最初に、本書の性格について、そして本書の前提となる「切手カタログ

グ」について説明する必要があるだろう。本書は『日専』を読み解くシリーズの一冊を構成している。『日専』とは、一九六一年から刊行されている『日本切手専門カタログ』（一九七六年以前の書名は『新日本切手カタログ』）の略称である。毎年秋に翌年版が刊行されてきたが、二〇〇七年版から内容別に三分冊となった後はそれぞれ一年おき程度で改訂されており、現在の最新版は以下のとおりである。このうち、第三分冊が扱う「日本関連地域」とは、アメリカ施政下の沖縄、満州国、中国・南方の日本占領地などを指す。

日本郵趣協会 日本切手カタログ小委員会（監修）

『日本切手専門カタログ 戦前編 二〇〇九―一〇』日本郵趣協会、

二〇〇八年

『日本切手専門カタログ 戦後編 二〇〇八』同、二〇〇七年

『日本切手専門カタログ 日本関連地域編 二〇〇八』同、

二〇〇八年

また、『日専』を読み解くシリーズ』シリーズは、『日専』に採録さ

れた切手類のうちいくつかの分野を取り上げ、その特徴や収集方法などを解説するものであり、本書以外にはこれまでに以下の各巻（刊行順）が刊行されている。

高野昇郎『手彫切手』日本郵趣出版、二〇〇五年

玉木淳一『軍事郵便』同、二〇〇五年

大村公作『新昭和切手』同、二〇〇五年

天野安治『大正切手』同、二〇〇六年

土屋理義『南方占領地 切手・ステーションナリー』同、二〇〇八年

次に、『日専』をはじめとする「切手カタログ」であるが、これは平たく言えば過去に発行された切手の解説付きリストであり、通常はさらに、収集品としての取引市場評価額も記載される。そもそも、切手とは郵便事業体が発行する料金前納証紙であるから、その解説付きリストの基盤となるのは事業体からもたらされる切手発行情報である。しかし、その内容は、事業体ならびに一般的な郵便利用者が通常の郵便利用のために必要な範囲にとどまるのが普通であるから、切手収集の観点で必要な情報まで含んでいるとは限らない。たとえば、自動販売機で販売される切手は、切り離しのための穿孔（「目打」と呼ばれる）が上下二辺にしかなく、それが四辺に施されている通常のシート状切手とは外見上明らかに異なっているので、収集上は別の切手として分類されるが、郵便事業体側の公示では図案と印刷面の大きさがシート状切手と同じであれば同一の切手として扱われる（ただし、郵趣家への配慮から、自販機用切手の発行に関する情報は公表されている）。また、第二次大戦末期前後には、調達担当部署に納品された新切手（新切手とはいつても、生産力低下のため以前よりも低水準の技術で製造されたものである）が、現

場での切手不足や混乱による連絡ミスのために、発行担当部署の知らないうちに配給・窓口発売されていたことがある。この場合は後から遡及的な発行公示がなされたが、中にはそれもないままに終わった例も見られる。さらに、製造技術の向上も切手に微妙な違いを引き起こす。昭和三〇年代の高度経済成長期には、新たな目打の穿孔機が導入され、アラビアゴムやでんぶん糊に代わってプラスチック糊が使われるようになったので、同じ図案の切手でも耳紙への目打の抜け方や裏糊の状態で分類できることがあるが、これらに関する記録は調達担当部署と発注先の内部資料に記される程度であり、外部公表や永久保存までは想定していない。

こうした事情ゆえに、収集目的での分類のためには郵便事業体側による情報では不十分なことから、郵趣家はそれに加えて、現実に存在する切手類そのものに着目しながら独自に情報を蓄積してきた。「切手カタログ」とは、それらの情報を整理して取りまとめたものである。あくまで収集目的で作成されるのであるから、特に事業体の切手発行方針が一貫していない時期、あるいは、製造技術の向上が見られた時期の切手については、事業体の意図とは異なる形の分類がされることがある。また、複数のカタログが編纂されている場合は、カタログによって分類方法が異なることも生じるし、同じカタログであっても改訂後の版でそれが修正されることもある。このことは、切手類の分類はカタログ編纂者の見解（学問の世界でいえば学説）であることを示している。

また、本書のタイトルとなっている「郵便史」という言葉にも注意したい。一般には、こうした言葉は、例えば「鉄道史」とか「海運史」という表現に見られるような、歴史学の分野史の一つとして理解されるで

あろう。実際、そうした意味での「郵便史」の研究も行われてきており、一般向けにも、明治期の日本を扱った、藪内吉彦『日本郵便発達史』（明石書店、二〇〇〇年）、主にイギリス郵便史を考察した、星名定雄『郵便の文化史』（みすず書房、一九八二年）などが刊行されている。それゆえ、本書をそうした内容の図書と思って手にする人がいるかもしれない。しかし、本書が扱うのは、歴史学の一分野としての「郵便史」ではなく、切手収集の一分野としての「郵便史収集」であり、切手類その他の収集対象品の取り扱いと位置付けを示すことが課題となっている。したがって、非郵趣家の認識に即してみれば、本書のジャンルは、「郵便史」というより、「郵便史的切手収集」とでも表現できるかもしれない。

なお、切手収集というと、一般には、「花」「童話」「赤十字」などのテーマを設定して、図案や発行趣旨がそれに関係する切手を収集する方法と、「イギリス切手」「中華人民共和国切手」「戦後日本切手」といったように、国や地域を、場合によっては年代をも限定してその範囲内の切手を収集する方法が、想像されるであろう。実際、この二つの方法は古くから行われており、現在でも主流を成している。郵便史収集は、この二つの中では後者に由来する収集方法であるとともに、これに対する独自性を持つ収集方法でもある。本書において著者は、郵便史収集との対比で、この後者の収集方法を「伝統郵趣」と表現している。伝統郵趣の基本となるのは、切手カタログに採録されている切手類をその分類にしたがって収集することである。ここでは、収集対象範囲とコレクション展開プランの骨子は、カタログという外枠によってすでに提示されているのであるから、端的な表現をするならば、カタログに採録された切手類をいわば穴埋めに集めていく形を取る。それに対して、郵

郵便史収集では、郵便事業とそれをめぐる社会事情について、時代、地域、分野などを限定してテーマを設定し、それに即して収集を進める。テーマの実例を、本書で紹介されている切手展出品作品（切手展については後述する）に求めると、「内容証明郵便制度」「水路郵便通送」「在朝鮮日本局郵便史 一八七六―一九〇〇」「昭和の戦争と日本」「沖縄における戦争と郵便」などが挙げられる。ここでは、収集対象範囲とコレクション展開プランは、それぞれの郵趣家が自身のテーマに合わせてゼロから設定していかなければならない。この点が伝統郵趣に対する郵便史収集の特徴である。それに加えて、伝統郵趣の指南書がこれまでいくつも刊行されているのに対して、著者が本書の「はじめに」で触れているとおり、郵便史収集の在り方を扱った文献は多くない。郵趣の世界における本書の刊行は、郵便史収集という独自分野について、包括的な見通しを与えるという点に意義がある。

## 二 本書の構成と内容

前置きが長くなったが、引き続き本書の構成と内容を紹介したい。

第一章「郵便史収集とは」は、郵便史収集全体についての概説であり、特にその独自性について説明する。第一節「郵便制度史の側面・要素」では、郵便史の基本であり、切手類にその情報が直接に反映される郵便制度そのものを取り上げ、その中で郵便史収集にとって必要な要素を、郵便料金、郵便網・通送経路、郵政事業史の三点から見ている。第二節「歴史的な背景との関連性」では、郵便事業の歴史一般との関連を、郵便事業の国内外での地理的展開や、社会的イベントとの兼ね合いから扱う。第三

節「他の切手収集分野との相違・関連性」、第四節「これまでの郵便史収集・研究の歩み」はいずれも郵趣独自の観点に拠る内容であり、前者は既存の収集分野と郵便史収集との関係について、後者は郵便史収集の歴史について扱う。

切手類そのものの分類を目的とする切手カタログの記載の流れは、個別の郵趣家ごとの独自プランに拠る郵便史収集の流れとは、必ずしも一致しない。そこで、第二章「『日専』にみられる郵便史の項目・要素」では、第一章で示された項目・要素が『日専』ではどのように記載されているのか、また記載された情報を郵便史収集の立場からどのように読み直せばよいのかについて、五節にわたって扱われる。著者は、第一章を受けて、郵便料金、通送経路、郵便印を、郵便史収集を構成する三本柱として位置付けているが、本章では最初の三節「郵便料金に関するもの」「通送経路（ルート）に関するもの」「郵便印に関するもの」をこの三本柱のそれぞれに充てて解説している。このうち、郵便料金と郵便印は、『日専』の記載項目から直接に情報が読み取れる。通送経路については、直接的な解説は『日専』にはほとんどなされていないが、本章では、『日専』の、実際に差し出された郵便物類（郵趣家は「カバー」と呼ぶ）に関する本文中の解説と、巻末の郵便料金表を組み合わせることによって、必要な情報を読み取る方法が示されている。さらに著者は、外国宛カバーの評価額が、同一切手・同一郵便種別でも経由地・宛先によって異なる例を示し、それが当時の日本と宛先国との関係の粗密や輸送状況など、郵便史的事情の反映であることに注意を促している。第四節「切手・葉書本体自体に郵便史背景があるもの」では切手類の発行ないしは存在自体が郵便史的に意義を持つ事例について、第五節「複合的な要素・その

他」ではそれらの複合的な、あるいはそれら以外の事例について、『日専』での記載方法とそこからの情報の読み取り方を示す。特に第五節では、切手発行以前の飛脚便、明治初期に欧米諸国が日本に設置した郵便局、日本による併合前後や第二次大戦直後の韓国・朝鮮地域での切手類の取り扱いを、例に挙げている。

第三章「郵便史収集を構成するアイテム」においては、切手類その他の収集対象品―郵趣界ではこれを「マテリアル」と呼ぶことが多いが、著者はそれに代えて「アイテム」の語を用いている―について扱われる。郵便史収集も切手収集の一環である以上、対象品は何よりも切手類であるが、伝統郵趣とは異なる手法を取る以上、アイテムの評価・位置付けも伝統郵趣の場合と異なることがあるので、それらをめぐる問題が二つの節で論じられる。第一節「いわゆる必須要素等」では、まず、先に挙げた郵便史収集を構成する三本柱を取り上げる。それらは、カバーの上で、貼付切手類、差出人住所や宛名、差出地・経由地・宛先地で押された郵便印などの形で現れるが、ここではカバーの実例を示しつつ、そこから三本柱に関する情報を解説する方法を説明している。また、この節では、伝統郵趣においては明らかに収集の主役となる切手類自体、殊に未使用の切手類について、郵便史収集においては位置付けが微妙であることを示唆している。第二節「その他の要素」では、郵便事業体側や利用者側が郵便の運営や利用のために用いた封筒類やラベル・用紙類、さらにはカバー上に記されている差出人・宛先人の住所氏名や業務のためになされた書き込みなどについて扱う。これらは切手それ自体ではないがゆえに、伝統郵趣では収集の対象外とされてきたが、著者は、これらの物品類がその郵便物に関する「情報」をもたらす点に注意を促してい

る。

第四章「郵便史コレクションの作り方」(目次では「郵便史収集の実践」

となっており、本文と食い違っている。本作りとして大きな失点である

う)は、本書の中で郵趣の観点が最も色濃く現れた章である。最初の二

節「アイテムの入手」「アイテムの評価・選定基準等」では、アイテム

の購入ルートと方法、状態、収集対象としての妥当性などを扱っている。

第三節「アイテムの調査・研究」では、入手したアイテムに関する情報

の収集について、郵趣家にとって身近な存在である郵便関係文献の利用

に触れた後、交通史・通信史をはじめとする一般の歴史学関係文献、さ

らには図書館・博物館などの所蔵文献・史料類の利用を提案している。

第四節「コレクションのまとめ方」と第五節「切手展における審査基準」

では、多数のアイテムを単に集めただけの状態(アキュムレーション)

から、テーマに最適なものを取捨選択して一定のストーリー展開の中に

整理・分類した状態(コレクション)にまとめ上げる作業と、その成果

を発表する場である切手展でのコレクション作品審査基準を扱う。

第五章「これからの郵便史収集」は、郵便史収集の今後の課題への見

通しを与える章である。第一節「必須要素に係る収集の今後」は、前

述の郵便史収集を構成する三本柱について、全体としては完成期に近付

いていると評価しつつも、二番目の要素である通送経路に関して、郵便

局の外国郵便交換機能の整備を地域発展と関連付ける捉え方を紹介し、

新たな収集方向の可能性を示唆する。第二節「一般歴史的な背景に着目

した収集」では、郵便史収集を、従来から意識されていた交通・通信史

にとどまらず、近・現代史のより一般的な流れの中でとらえ、それらを

表現する方向を提案する。

以上が本書の主体をなしている部分であるが、最後に、関連する事項

が二つの付録に取りまとめられている。付録一「ある実験的作品の展開

―新たな郵便史収集をめざして―」は、著者自身が二〇〇六年に切手

展出品した作品「確立・発展期の近代日本―日清勝利から満州国成立ま

で―」を、本書での記述と関連付けて解説しており、付録二「カバーの

偽造・変造」は、郵便史収集の主なアイテムであるカバーについて、そ

のまったくの偽物である偽造や、真正品に切手の貼り替え・貼り加えや

偽郵便印を施した変造を、扱っている。また、収集にかかわるエピソード

が四つのコラム「赴任地と郵便史」「日下亥太郎との不思議な出会い」

「絵葉書収集と郵便史の間」「二・二六事件と郵趣」として、第一章〜第

四章のそれぞれ末尾に収められている。

なお、第四章をはじめ本書で頻繁に言及されている「切手展」に関連

して付言しておきたい。郵趣家は、アイテムの收藏・整理用具として、

ストックブックの他に切手アルバムを多用する。切手アルバムとは、物

理的には厚手用紙を用いたルーズリーフであり、郵趣専用品が商品化さ

れている。これに、やはり専用の用具で切手類を貼り込み、必要な解説

文を記載する形でアイテムを整理する。切手展とは郵趣家のコレクション

ン発表機会であり、出展は切手アルバムのルーズリーフを展示する形で

行われる。さまざまな規模・趣旨の切手展が開催されており、我々が近

隣の郵便局でしばしば目にする、地元の郵趣家による切手類の展示は、

最も小規模な形態の切手展といえる。それに対して、本書で扱われてい

る切手展は、出品作品を、アイテム自体、全体構成、展示技術などの観

点から審査して優秀作品を表彰する趣旨のものであり、現在のところ、

そうした趣旨による日本全国規模の代表的な切手展が、二つの主催団体

によってそれぞれ毎年春と秋に開催されている。本書末尾「本書で言及した主な文献、および作品」のうち、「出品作品」の表記がある事項は、そのような切手展への出品作品を指す。また、第四章第四節・付録一の図版は、いずれも切手展出品作品のルーズリーフ（バインダーへの閉じ穴がないが、切手展出品の際には閉じ穴のない展示専用リーフが用いられる）であるが、一二六頁図一七のみ外見が異なっているのは、大型のアイテムを展示するために特別な処理を施しているためである。

### 三 本書から何を読み取るか

最初に触れた刊行の経緯からわかるとおり、本書は基本的に、郵趣家のために書かれた文献である。したがって、読者が、日本切手全般と切手カタログ『日専』についての一通りの知識を持っていることを、前提としている。そのような読者、すなわち郵趣家の視点に基づく本書の書評は、郵趣誌において然るべき形でなされるはずであるから、ここでは、郵趣家ではない歴史家の視点から、本書を見ていきたい。

最初に、本書の基本的な方向性についてである。先にも触れたことであるが、本書は、その書名から非郵趣家が抱くイメージとは異なっており、郵便史の概説書ではなく、あくまで切手コレクション構築のための手引書である。したがって、郵便史の具体的な知識を提供することは本書の課題ではない。むしろ著者は、郵便史に関する基礎知識を持つ郵趣家に対して、単なる切手知識・郵便知識の世界にとどまることなく、それを積極的に一般的な歴史知識と関連付けることを提案している。もちろん、狭い世界に籠ることなく視野を広げていく姿勢は、趣味人に限らず一般

に求められることであろう。しかし本書は、それを個人の収集態度の次元で語るのではなく、郵趣の専門的な営みである郵便史収集そのものを、一般の歴史学の脈絡に向けて、外延的かつ有機的に発展させる可能性あるいは必要性を唱えていると、評者は考える。

郵便史収集の発展を、歴史学と多少関連付けながら考えてみよう。歴史学においては、過去の時代の遺物のうち、どこまでが「史料」の範囲かということがあらかじめ限定されていることはない。すなわち、学界の理解を得られる形で吟味がなされ、その上で有益な情報を発信するものであれば、物理的にはいかなる物品であろうとも史料としての資格を得られるのであつて、外的体裁を理由に最初から門前払いされることはない。他方、郵趣においては、「切手」収集である以上、切手類こそが収集対象であるという原理が存在する。それ以外の物品を対象にした時点で、切手収集は切手収集でなくなる。しかし、郵便史収集においては、郵便事業運営の実態や、政治・経済・社会の中での郵便事業の位置付けなどが扱われるため、それらを示すものにまで関心を広げることになる。そうして切手類以外にも収集対象に含めるようになると、それは歴史学の特殊テーマ研究に近づく一方、切手収集とは呼びびがたい様相を帯びてくる。そこにジレンマが生じる。切手収集としてのアイデンティティを保つためには、どこまでを対象物として認めるか、それが郵便史収集の大きな問題点であり、著者を含む郵便史収集家が非常に苦慮した点であろう。この点を解決させる手掛りを、著者は、郵便史に関する「情報」を収集品から読み取ることと求め、そうした「情報」が得られるか否かを収集対象の基準とすることを試みてみると、評者は捉える。

伝統郵趣においては、切手類という「モノ」が収集対象となっているが、

その「モノ」に関する「情報」は「モノ」を理解するための手段、または「モノ」をコレクション内に位置付けるための手段として、したがって端的にいえば脇役としての性格しか持ち合わせていない。郵便史収集においても、郵趣家が直接に手にするのがカバー（郵便物）という「モノ」であることに変わりはないのであるが、著者が着目するのはカバーそれ自体ではなく、郵便料金や運送経路といった、そこから読み取れる「情報」であり、この考え方は特に第三章第一節での、郵便史収集の三本柱に関する記述に現れている。ここでは、一見、カバーという物品を収集しているように見えながら、実は「情報」が収集の対象となっており、伝統郵趣の場合と比べると、「モノ」と「情報」の立場が逆転した形となっている。著者のこうした姿勢は、物理的にはカバー上で直接見て取れる状態にある郵便印についても当てはまる。その可視性ゆえに、郵便印（より正確にはその印影）の収集は郵便史において古くから行われてきたし、特に印影の形態分類には力が入れられてきた。もちろん、外形的分类は最も基礎的な作業であるし、使用済切手―当然その上には郵便印が押印されている―の分類・整理には、そうした作業によって得られた知識が不可欠である。しかし著者は、郵便史収集においては、単なる印影形態の異同ではなく、その背景にある郵便や社会状況にも考慮すべきであると、注意を促す（七六頁）。そこには、郵便印を、その郵便物の輸送にかかわる「情報」の現れとしてとらえる態度が見て取れるのである。

歴史学から郵趣への情報提供、換言すれば、郵趣界による歴史学の成果摂取は、郵趣界の問題であるから、今ここで深入りする性格の問題ではないであろう。著名な郵趣家の中にも歴史家はいるし、そうでなくとも歴史学文献に目をおす郵趣家も少なくないはずである。ただ、歴史

学的な調査手法への関心は、郵趣家を含めて一般の人々にはまだ深められていないともいえよう。そうした中、著者自身が行った調査に関する記述は、極めて興味深いものがある。具体的成果は別に公表しているので本書では手順のあらましを記すにとどめているが、第一次大戦中に大連からアメリカ宛に差し出された郵便物に押された「検」表示印の正体を明らかにするために、郵便検閲との関係を推測した後、当時の刊行物や内部資料を探して、国立国会図書館、ていぱーく（逓信総合博物館）、防衛省防衛研究所戦史図書館と訪ね歩いた模様が紹介されている（二二二頁以下）。ここで取られた手順は、歴史学において通常用いられる手法であるが、おそらく、多くの郵趣家にとっては、趣味の世界でもここまでやるものなのか、と驚きを呼ぶことであろう。もちろん、こうした手法は、これまでも一部の郵趣家の間で実行され、その成果も紹介されてきたところであるが、その具体的な手順が、本書のように郵趣家の広汎な層を讀者とする図書で示されたことはあまりないと思う。

そして、著者が郵趣家としてこうした調査手順を取ったことは、歴史家にとってもまた同様に驚きであろう。非郵趣家は―そのうち壮年層の多くが、少年時代に一度は自らが切手収集を経験しているのだからなおさらのこと―切手収集を単なる「モノ集め」としかとらえない傾向にあるが、この事例は、切手収集が決してそうしたレベルにとどまるものではなく、その営みが歴史学と親和性が高いことを示しているからである。類例として挙げられるのは、二・二六事件についての調査に関するコラム（一三五・一三六頁）である。こちらのほうは著者自身が満足できる成果を挙げるに至っていないようであるが、発端となった著者の疑問は、戒厳司令部による事件直後の郵便検閲印の使用が、事件の舞台



である都心部ではなく少し離れたところに位置する郵便局でなされたのはなぜかという点だという。この問題提起がかかわるのは同事件の中では瑣末な点にすぎないであろうが、近代政治史に疎い立場ながら評者の希望的観測を述べると、今後、これが同事件の研究に何らかの形で寄与することになれば（通説を覆すことはないであろうが、通説を補強するものであったとしても一定の意義を持ちうるはずである）、著者にとっても郵趣界にとっても、大きな喜びとなるであろう。

一般の歴史学による郵趣界の成果撰取の動きは、残念ながら活発とはいえなかった。これは決して、歴史学において郵便に関する知見がないがしろにされているからではない。むしろ、例えば、月日のみしか記されていない書簡の年代を外形面から推測する際に、封筒上の切手や郵便印が手掛りとなることはよく知られているところである。評者自身、日本近代経済史の研究者から、切手類の図版や発行日データを記載した手頃な資料集（郵趣家の立場でいえばまさに切手カタログのことである）はないかと相談を受けたことがある。にもかかわらず、郵趣の知識が歴史学によって共有されていないのは、ひとつには、郵趣の成果公表の場が、多くの人々の目に触れにくい小規模な出版物に限られているからである。本書刊行の契機となった『日専』は、郵趣家の多くが手元に置くほどの基本文献であり、本書と同様に郵趣界では最大級の專業出版社が制作・刊行に関与しているが、それですら広く一般に知られているとは言い難い。

繰り返し述べたとおり、本書は郵便史の概説書ではないから、個別の知見をここから直接に読み取ることが残念ながら期待できない。しかし、本書は、例示的とはいえ、郵便物（郵趣家にとってはカバー）からは単

に郵便事業や切手類に関する情報が得られるだけでなく、その時代の政治・経済・社会の動きをも読み取れることを強調しており、歴史家にとっても、郵便物の史料としてのさらなる利用可能性を考える手掛りとなる。ちなみに、日本の切手・郵便料金、郵便印についての具体的な知見を得るためには、本書刊行の契機となった『日専』の他、本書第四章で言及されている『日本郵便印ハンドブック』（郵便印ワーキンググループ（編）、日本郵趣協会、二〇〇七年）が有用であろう。

非郵趣家である歴史家が本書を利用することに関連して、もう一点、切手の製造面（印刷・用紙・目打など）についての記述に触れておきたい。未使用の切手は、伝統郵趣においては基本的な収集対象であるが、カバーすなわち郵便物を重視する郵便史収集においてはあまり大きな役割を与えられていない。郵便史収集では切手製造時の状況よりも、切手使用時の状況の方が重要だからである。本書もその流れを汲んでおり、特に第三章第一節では、未使用切手が本領を發揮する切手の製造面について、郵便史収集における位置付けが否定的に扱われている（八一頁以下）。しかし、これはあくまで郵便史「収集」の次元における評価であって、製造面の知識が郵便史全般において意義を持たないと言っているわけではないことに注意したい。製造面の知識はその切手の発行時期を推定するのに役立つ、とりわけ歴史家にとっては、それが郵便物の年代比定につながるからである。大正期から昭和初期の書簡の年代比定として挙げよう。大正二年から発行された一連の普通切手は、昭和二二年以降順次図案が改正されるまで使用され続けた。そのため、この切手を貼った書簡の日付に年を欠く場合、郵便印の日付（年月日が表示されているが元号は記されていない）を見ても大正か昭和か判別できないこ

とがある。しかし、この一連の切手は途中で用紙・印刷面寸法・目打が微妙に変更されているので、それを観察することによって製造時期を絞りこむことが可能である。

御自身も「あとがき」で述べられているが、著者は、本書の執筆に際して時間的に無理をされたように思う。これは、本書が、出版者側から持ち込まれた企画（それもシリーズ物）であることに加えて、同じシリーズの他の図書のテーマが概ね伝統郵趣の枠内に収まっているのに対して、本書の場合は、伝統郵趣に対する郵便史収集の位置付けという、大きな課題を背負っていることにも起因するであろう。殊に、収集対象物の範囲について、著者は「情報」を手掛りとして取りまとめているものの、郵便史という収集分野がなおも発展途上にあり、郵趣家たちの合意点に達しているとは言い難い部分もある。

本書は、現時点での合意点を最大限に取りまとめつつも、同時に、今後の合意に向けた見通しを提示しているともいえよう。本書を新たな出発点として、郵便史収集自体、そして特に収集の方法論がいつそう発展することを期待したい。

最後に、主に形式面で気になった点を記しておく。郵趣のみならず趣味関係の出版物全般で同様のことがしばしば見られるが、一六四・一六五頁の参考文献の記載方法が学術文献で用いられる方法と異なっており、郵趣との縁が浅い読者を当惑させる。すなわちここでは、論文名・記事名、その所収書名・雑誌名のいずれもが、「」に収められている。そして、両者の区別のため二つの書体が用いられているのだが、雑誌所収論文の場合には著者名・論文名はゴシック体、所収雑誌名は明朝体となっているのに対して、個別の所収論文に言及せずに雑誌名

だけを記載する場合（雑誌自体が郵便史関係をテーマとしているためである）には、刊行者名とともに雑誌名もゴシック体となっており、雑誌名の扱いが異なっている。さらに、論文・記事の所収雑誌中の頁数も記されていない。趣味関係の出版物には、私家版ないしは同人誌の性格を帯びたものも多く、また、雑誌所収記事は年度（巻）を越えて長期連載されることしばしばあるため、学術文献のような記載方法に馴染みにくいという側面は確かにあるようだ。かつて、趣味の雑誌が学術雑誌の真似をする必要はない、という趣味人側のことばを目にしたことがあるが、評者は、学術文献での括弧使用の区別や巻・号、頁数の記載は、権威主義的形式墨守によるものではなく読者の便宜を図るための実用主義から行われるものであると、理解している。

およそ書物と呼ばれるものの宿命であるが、本書も残念ながら若干の誤植を免れることはできなかった。そのほとんどは単純なもので、本来の語句が容易に推測できるものであるから、ここにはいちいち記さない。ただ、一二二頁と一六五頁に記されているドイツ人郵趣家アイヒホルン氏の姓 (Eichhorn) とその論文の所収雑誌名 (PHILATELISTISCHE JAPAN) は、それぞれ、Eichhorn、PHILATELISTISCHE JAPANの誤りであろう。また、この雑誌について評者は未見であるが、誌名の表記は、形容詞の語尾と二二三頁の同誌の図版から推測するとPHILATELISTISCHE JAPAN-BERICHTEまたはPHILATELISTISCHE JAPANBERICHTEの方が適切であり、読者の便宜の観点からは、一六五頁の文献目録には論文の原タイトル（ドイツ語）と所収号数（おそらくはNr.133）も記すべきではないかと考える。